

## 第1-2部 パネルディスカッション

### 【横田】

会場の皆様から大変多くの御質問をいただきました。これからそれらを御紹介しながら、パネリストの方にコメントをいただこうと思います。まずは、加藤さんへの御質問を御紹介させていただきます。「災害の前から、回復力を高める具体的な方法や取組があれば御教示ください」という御質問です。そして、その場合に災害時のショックに対しての回復力を高めるということを特に念頭に置いています、という御質問ですが、加藤さんお願いします。

### 【加藤】

いろいろな取組が考えられると思いますが、一つは、災害の影響を受けない準備をしておくことが、とても大事だと思います。あとはやはり、そういった状況に陥った時に、どのような心の問題が出る可能性があるのかということを知っておくことが大事だと思います。富永先生が御紹介されましたが、今、神戸の学校等では、必ず命を大切に教育を実施しております。

私も中学生の子どもがいるのですが、彼らが小学生の頃というのは、必ず年に数回は、命について考える時間があり、その中でも災害のことを学ぶことがあったのですが、例え自分が影響を受けないにしても、周りの人が影響を受けた場合に、どのようなことを考えなければいけないということも含めて学ぶということは、とても意味があると思います。そういう準備性を高めておくことは、とても回復に向けては重要ではないかと思います。もちろん、それはもう少し小さなコミュニティでも必要なことで、家族の中で災害について話をし、それこそ備蓄などについても話しておくことも大切なことだと思います。

### 【横田】

加藤さんに御質問が追加で来ていますので、もう一つ続けてよろしいですか。「安全・安心な環境、生活を確立するというためには、社会は具体的にどのような対応が必要か、また、受け入れる一般人はどのように対応したら良いのか」という加藤さんへの御質問です。

### 【加藤】

非常に難しい御質問で、答えに窮します。これは多分、インフラの復旧だけを考えるのではなくて、やはりその被災した後の生活の再建というのが、まず被災された方の安全・安心を高めるのだと、考えることだと思います。例えば、いくら高い防潮堤を作っても、そんなものは何十年、何百年に一度の備えにしかないわけであって、今の生活を取り戻していくことの方がよほど大事なわけです。生活を取り戻していくということが、安全・安心につながるという認識を持つことが、現状を踏まえると、必要なことではないかと思います。

### 【横田】

もう一つ追加で、加藤さんに質問が来ました。摂食障害のある方だということなのですが、「食べることにに関して、理性のコントロールがつかえません。震災時には救援物資の食べ物が町中にあふれていて、食べる物がどこでも手に入るという状況で、自分としては人格が崩壊するような危機感を覚えます。実際には何も食べていないのに、自分は途方もなく過食していると思い込んで、水も飲まなくなるような、飲まなくなって衰弱するというような状況もあり、実際、入院もしました。このような人の訴えというのは、こういう緊急時、災害時に、どう受け止めてもらえるのだろうか」という質問です。多少、専門的かもしれませんが、よろしくお願いします。

**【加藤】**

非常に切実な話だと思います。やはり障害や病気を抱えられた方の声というのは、なかなか非常時には伝わりにくいです。そういった方たちが声を出せない状況になってしまう。こんな大災害なんだから、あなたの個人的なことなんか蓋をしておきなさい、といったことを言われてしまうので、とても苦しい境遇がますます苦しくなっていくという状況になります。ですので、障害を持たれている方の意見もきちんと聞くことが大切です。特に、避難所の環境では、障害を持たれている方は非常に遠慮されます。高齢者もそうですが、自分が迷惑にならないような振る舞い方をされてしまうので、とてもしんどい思いをされることが多いのです。ですので、それを少しでも支援する側が知っておいて、そういった声に耳を傾けるということも必要でしょう。

また、被災後というのは、糖尿病など食事を管理しなければいけない病気を抱えられた方は、とてもそれが難しくなります。どんどん支援物資が提供されて、カロリー制限ができない状況の中で、糖尿病などを非常に悪くされた方たちも多いのです。そういうことも認識をしなければいけない。別の例では、阪神・淡路大震災の時には、支援物資の中にアルコールが入っていたのです。これで少し心を癒やして下さい、ということで、支援物資のセットの中に日本酒が入っていたりしたのです。これは、一見とても心が安らぐように思われるかもしれませんが、しかし、これによってアルコール依存の傾向を持っておられる方たちは、ますます問題をひどくしましたし、避難所の中で、お酒が元でトラブルになってしまった事案が起こったりしたのです。ですから、そういうよかれと思ってすることが、いろいろな弱さを持った方にとっては、あだになってしまうということも、知っておく必要があるのではないかなと、今、御質問から少し思い出しました。

**【横田】**

ありがとうございました。次に、富永さんへの御質問が2、3ございます。一つは、1年ほど前に、岩手県にボランティア活動に参加した方からの御質問です。そこで印象に残ったことは、「被災地の子どもたちは、自分の家族がどのくらい被害に遭ったのか、遭わなかったのか、同じ被災した場合でも、仮設に入った人と入らない人、そういう異なった状況に対して、非常に敏感に反応する。そんな中、子どもたちを安心させるためにはどのように取り組んでいったらいいのだろうか。私は元の生活を取り戻すこと、そして社会で自分が必要とされていることを自覚することが必要だと思いました」という御質問です。

**【富永】**

必要とされる存在ということでは、岩手県のある地域なのですが、「<sup>とらまい</sup>虎舞」という代々伝わる踊りがありまして、子どもたちが一生懸命踊るのです。そこでは、地域の方たちがそれを見て、勇気付けられると言います。子どもたちはその声を聞いて元気が出るといいます。そういった仕組みが展開されています。それから被災についてですが、今回の津波は、津波が来た地域、来ていない地域ではまるで世界が違うのです。ですので、それぞれの子どもたちに、それぞれの思いがあり、それを語ってはいけないという雰囲気はどうしても出てしまう。それを乗り越えるためには、まず信頼できる人にその思いを語る必要がある場が必要です。それを岩手県では、教育相談週間や、心と体の健康観察でこころのサポート授業をやった後、チェックリストを踏まえながらも担任の先生が一人一人の子どもと、全員に面談する時間を作っています。

それと同時に、その地域を支えるスクールカウンセラーが巡回して、必要とする子どもの声を聞くという仕組みができています。もう一つ、できていないのは、クラス単位でそういうことを落ち着いて語り合っ、お互いを認め合っ、励まし合うような場がなかなかできないのです。理由は私がお話ししたように、日本の教育課程の中で、そのような時間が非常に限られている。学級活動の時間ですか、その時間がない。道徳の時間はそういうことには使ってはいけないというのが、道徳学者の弁です。ですが、子どもにとって必要な体験ですので、道徳の時間でもそういうことが行われるようにするの

が今からの課題だと思います。ですから、日本は道徳の教科化に向けて、今、メディアを通じてメッセージが流れていますが、マスコミの方も教育現場に行って何が課題なのか、それを見極めて記事を書いて欲しい。そして日本を変えていって欲しいと思います。

#### 【横田】

次の質問は、既に富永さんにある程度、お答えいただいていると思いますが、もし更に付け加えることがあればお願いします。「阪神・淡路大震災の時と、それから東日本大震災とで、子どもたちの心のケアに取り組んでこられた御経験から、そこに大きな違いがあるように思われますが、これからの学校での防災教育の新たな課題はあるでしょうか」という御質問です。もう既に触れられていますが、改めてこの御質問にお答えいただけたら幸いです。

#### 【富永】

先ほどのお話の中でも申し上げましたが、防災教育の中に、心のサポートの考えや実践を統合して子どもたちに伝えて欲しいというのが、私たちの考えです。2011（平成23）年4月末の読売新聞でしたでしょうか、小学5年生の教科書の中に防災教育の物語があるのですが、被災地の先生方はそのことを授業でなかなか取り上げにくい。いわゆる津波を扱っている「稲むらの火」の物語です。河田恵昭（関西大学社会安全学部教授・社会安全研究センター長）先生が書かれたものです。それを取り上げると、子どもたちにつらいことを思い出させてしまって、悲しくなる。この教材をどうやって取り上げていったらいいだろうと、被災地の先生方は苦悩したのです。そういうことについての指針は、やはり文部科学省が取りまとめていく必要があると思います。避け続けることは、傷を深めます。ですが、急性期いきなりそのことを取り上げることは、一部の子どもたちにとってはつらすぎるかもしれない。

ただし、心のサポートを取り入れた避難訓練は、急性期にも積極的にやっていく必要があるだろうと思います。そして、ある程度、中期になっていくにつれて、地域防災学習や津波についての学習を進めていく。その時も心のサポートの観点をきちんと取り入れて、支援の必要な子どもを事前に個別にアクセスして、心のケアの仕組みについて情報提供をする。

震災後、1年半後にある小学校でこういうことがありました。内陸にある小学校で、被災地から10人以上の子どもが転居してきていました。親を亡くした子どももいました。震災後1年半経ったからと被災地で震災を経験した人を呼んで防災講演会を企画しました。「こんなふうに津波が、こんなところまで来たのだよ」と講師の先生が話し始めたときに、沿岸部から来ていた子どもたちが、ぞろぞろと体育館を出て行ったのです。そして、保健室に行くと、ある子どもは号泣したそうです。子どもたちは、そのように心の傷を抱えているので、事前にそのことをきちんと把握してアクセスして、「つらいことを思い出してドキドキしたり苦しくなったりすることがあるよ。でも、津波という言葉や津波の映像は人の命を奪いません。何回かチャレンジしていくうちにドキドキは小さくなります。でも、余りに苦しいことから始めないで、少し苦しいことを選んでチャレンジしましょう。子どもの心のペースを守りながら対応していくという、防災教育と心のサポートを一体的に進めて欲しいのです。これは被災地の中でも、そういうプログラムを防災教育の中に織り込んで展開して欲しいということです。

#### 【横田】

今のお話の中に、既にこの次の御質問のことが関係しております。「先生のお話では、つらい経験というものを否認したり、それから過去の苦い経験を話させないということは、良い場合もあるし、良くない場合もあって、ケースバイケースだと思われれます。しかし、話させないことによって良かったケースと、話させたことによって良かったケースについて、もし事例があったら教えていただきたいです」という御質問です。

**【富永】**

急性期は、非常に興奮するわけです。過覚醒というのですが、話し出したら止まらないということがある。そして、話し過ぎた後で、あんなに話すんじゃなかった、話さない方がよかったと思ってしまふことがあります。これは、身近な人のサポートだけではなくて、取材においても同じです。一見、気丈に取材を受けた人が、その後ものすごくしんどくなるという事例があるのです。大切なことは、やはり急性期に安全・安心な環境を与えることなのです。そして、感情のコントロールができるように、自分自身がそういう方法を身に付けていく。周りの人がそのことを理解する。そして、中長期に少しずつ震災以降体験したこと、最近頑張っていることを含めて、話す機会、表現する機会を折々に持つて行く。そういった仕組みを作っていくことが必要ではないかと思っています。

**【横田】**

ありがとうございました。では次に、小林さんに御質問がございます。「まちづくりはとても良い取組だと思えます。そこに学校は入ってくるのでしょうか。もう少しその点について詳しくお話を伺いたいです」ということです。

**【小林】**

学校は大変重要です。災害で一番被害を受けるのは弱者と言われておりまして、東日本大震災も阪神・淡路大震災もそうですが、やはり高齢者が大きな被害を受けておられます。また、所得の低い方々や子どもも非常に災害に対して弱い存在で、それは常識です。阪神・淡路大震災では、ほとんどの学校は鉄筋コンクリートで、それほど大きな被害を受けていませんし、受けても直撃的な倒壊まで至っていない学校が大半でした。これらの学校は火災にも強いということで、ほとんど全ての小・中学校が避難所になり、逆にそれがために、学校の先生たちが思いも寄らないいろいろなケアや避難所の運営をしなければいけなくなってしまった例があります。

東日本大震災についても、(宮城県石巻市立)大川小学校などいくつか例外もありますが、やはり新しくできた学校は高台にありますし、様々な面で学校が防災の拠点になりました。日本の場合はそういった学校がコミュニティにおいて非常に大きな避難拠点・防災拠点になっている状況は、今までの経験の蓄積の結果だと思えます。これは関東大震災の時から、回復・復興の拠点として学校をなるべく防災・防火に強くし、あるいは隣に公園を設置して一緒に災害時に使えるようにすることが行われてきた結果だと思えます。

中国の四川や台湾などでの地震の時がそうでしたが、学校がまず一番弱い。そこで子どもたちがたくさん亡くなっている、一番被害を受けるというのが、その世帯や町にとっても、最も悲惨な状況だと思えます。ですので、学校をとにかく強くしようということは、日本の防災の歴史の中では、延々とやってきたことの結果ですので、当然、御質問にありますように、町の中で学校をどのように考えるかというのは、非常に大きなテーマです。幸いにも今それを声高く叫ばなくても、今まできちんとやってきたので、余り言う必要がないかと思えます。しかし、今までの経験の蓄積があるということは、忘れずにやっていくべきだと考えております。

**【横田】**

ありがとうございました。おっしゃるとおり、日本では、防災の観点はまず最優先で学校作りが考えられて、建物をしっかり作るという伝統がありますし、行政側も必ずその点を強調した学校作りを行っております。ですから、今の点については、日本の場合は他の国と比べて、よく取り組んでいるという感じはしますが、東日本大震災の場合には、小学校が津波に流されたケースがありましたので、学校までもがやられてしまう事態というのも想定することが今後必要だと思えました。その点については何かございますか。

**【小林】**

今、学校が駄目になるのであれば、町の全てが駄目になると思います。ですから、そこまでの事態は今のところ想定する必要はないと思います。ただ逆に、防災のためにしっかりとコンクリートで学校を建ててしまうと、地域の懐かしい木造の校舎がどんどん無くなってしまっています。普段から、少し親しみ深い伝統的な木造空間がどんどん町からなくなり、特に子どもたちが育つところにもそういった伝統的なものが無くなっている。これは、ここ数十年間の建築側の考え方だったのですが、阪神・淡路大震災や東日本大震災の事例を見ますと、そういう軟弱なことは言っても始まらないのですが、やはりそういうことも当然、日常的な空間として重要だと考えています。

**【横田】**

ありがとうございます。次も小林さんへの御質問です。まちづくりについて、「町ができて何年かすると、住んでいる人が変わり、コミュニティが変化することがあると思います。20年、30年経っても持続できる、そういう防災・災害に強いまちづくりについて、どのような考え方があるかお教えいただけますか」という御質問です。

**【小林】**

正にそこが防災の最大の問題だと思っています。神戸でも、特に東神戸の辺りは大阪に近いので、随分と通勤族がいて、阪神・淡路大震災から約19年前のような人口に戻っているわけですが、住民は半分以上入れ替わっています。ですから、震災を全く誰も知らない、親も知らない、子どもも知らないという人が半分以上いるわけですから、被災体験を知っている人の方が少ない。

西神戸はまだ下町が多いので、まだまだ地域住民を把握されている方がたくさんおられます。基本としては、忘れ去られるという前提で物事を考えた方がいいと思っています。関東大震災から約90年経ちますが、ほとんど震災後10年ほどの間に言われていた防災に対する心構えなんて、今は誰も覚えていません。一番簡単なのは、火鉢を頭の近くに置いて寝ろ、上から梁が落ちて来ても頭だけは助かる。そのようなことを皆、常識としてやっていました。ですが、今は火鉢を持っている人もほとんどいない。阪神・淡路大震災の時も、19年間多くの教訓がインターネットや書籍などで発信されましたが、多分あと20年もしないうちに皆、忘れてしまうのではないかと思います。東日本大震災の教訓も、多分100年後には覚えてない。1896（明治29）年明治三陸津波の多くの石碑なども、ほとんど忘れられていました。

この状況を打開するために、ずっと私は人と防災未来センターなどでいろいろと相談していましたが、やはり記録はあかんぞと思っています。プロ野球でも、三冠王の記録を持っている人は忘れられても、長嶋茂雄の記憶は忘れられない。やはり記録よりも記憶をきちんと持つ。身に付いた震災文化をもっと大事にしないとダメです。いくら一生懸命口酸っぱく当時の状況を伝え、対応策を記録として残していても忘れられる。語り継いでいくこと、言い伝えや紙芝居、歌などで身に付けてもらう、これは子どもの頃からずっと忘れません。一番有名な例では、インドネシア・スマトラ島のアチェで起きた津波の時、20万近くの方が流されて亡くなられたのですが、シムル島の人たち8万4千人はほとんど助かっている。シムル島では100年に1回ぐらいは大津波が来ていて、津波が来たら逃げろという歌が作られ、島民の方は皆、よく歌っていた。ですので、津波が来た時、シムル島では皆、高台に逃げることができた。和歌山県広村（現在の有田郡広川町）の「稲むらの火」も同じですね。歌や紙芝居、教科書などで、身に付いたことが非常に重要な役割を果たす。それは多分、遺伝子のように子どもに受け継がれていくことで、50年100年経っても核となるところは残る。ですから、そういったことを語り継ぐというのが一番重要なことになります。今、世界災害語り継ぎネットワーク TeLL-Net（Transfer Live Lessons Network：テルネット）という活動を10年ぐらい行っております。津波だけではなく、様々な自然災害に対する記憶を、広く世界の人と共有すると同時に、後世の人とも共有できるようなものにしていこうとしています。

災害の教訓などは、基本は忘れてしまうものだという前提で、物事を考えた方がいいと考えております。

**【横田】**

もう一つ、小林さんに御質問があります。この質問された方の実家は宮城県石巻市にありまして、「津波で集落がきれいに流され、土台だけが残りました。しかし、避難所から仮設住宅に移った方は元気になっています。心の中の確執もほぼ元の生活サイクルに戻りつつあります。国を始め、全国の方々からの支援にも感謝しております。ところで、牡蠣の養殖などでは、風評被害などによってそれまでの職場が成り立たなくなり、お先真っ暗です。そういった面では、どのような支援が可能なのか、まちづくりという観点で考えてもいいと思いますが、小林さんに御質問したい」とのことです。

**【小林】**

これも一番大変な話です。神戸も全く同じ状況です。神戸の場合、港が壊滅しました。それまで、世界のベスト10に入っていた港の扱ひ量が、震災後約20年経ち、今は40位以下辺りまで低迷している。それと同時に、西神戸の靴の地場産業も壊滅しました。ほとんど回復していません。このようなことは、震災を機に、自由競争の資本主義社会で弱者を尻目に、他でも稼いでしまうという連中が中心に、牡蠣でしたら他所の牡蠣を買うようになる。皆さんは、三陸の牡蠣生産が回復したら、三陸の牡蠣をもう一度昔のように買うのが当たり前だと思われるのですが、実際にはなかなかそうはいかないのです。資本主義の冷徹な食い合いといいますか、一度落ちたところは放っておかれる。それは先ほどの話とよく似ているのですが、そういうことを前提に物事を考えた方が良いのです。ですから、牡蠣を養殖していて、震災などの影響で駄目になって客がいなくなり、また回復しても風評被害で駄目な状態が続く。いつかそういうことになるのだ、ということを前提に物事を組み立てれば、また違う見方が出てくるのではないかと思います。東北の方々には少し冷たい言い方になるかもしれませんが、神戸の人たちも全く同じことを経験してきています。日本全体が高度経済成長期であれば、そのようなことは吸収されてしまって、なんとかなってしまうことができるのですが、全体が下降気味にあるところでは、人口もどんどん減っていき、そこはさらに経済が下降する。これは資本主義経済社会の中で生きる以上、しょうがないという前提で、それでも頑張れることはあると考えた方がいいし、そのことをもっと社会的に共通認識していくような形で、マスコミや産業界の活動に入り込んでいかなければならないと考えております。

10年ぐらい前から言っているのですが、三陸などの東北の沿岸部は、住まいと漁業とか、住まいと農業を一体化したところが被災を受けていますから、仮設住宅よりも仮設店舗、仮設工場を先に作らないと駄目です。これは随分といろいろな人たちが言って、実際そういった活動は行われています。神戸に比べたらはるかにたくさんそういうことが取り組まれています。まだまだ弱いと思います。これから新しい家ができてくると、なんとかなるのではないかとされていますが、雇用や労働についてのこ入れが、本当は一番大事だと考えております。

**【横田】**

ありがとうございました。それでは次に、仙台市の岩切から来られた菅野さん、緑上さんに、御質問が多く来ていますので、紹介させていただいた上で、御回答いただければと思います。最初の質問は、「避難所でペットはどのように扱われたのでしょうか」という短い御質問です。御存じの範囲で結構ですが、いかがでしょうか。

**【緑上】**

知っている範囲ですが、避難所によって対応は様々でした。ペットは避難所である体育館の中には入れず、そばにテントなどを設けて、そこでまとめて世話をする形がありましたし、ペットも家族だ

からと一緒に過ごすことができたり、部屋を分けて、ペット連れの方とそうではない方を分ける形であったり、いろいろありました。中には極端な例ですが、ペットも家族だから、家族（ペット）を受け入れられない人の方が出て行ってください、というパターンもあったというお話も実際に見聞きはしました。

#### 【横田】

基調報告では、ペットがうるさいという苦情もあったようですが、避難所や仮設住宅では、普段の生活スタイルとは違って、自分でコントロールできない身近さで隣の人と住むわけです。ですから、ペットの問題も深刻に出てくるのだらうと思います。これはその時のその場所によって、みんなで話し合ったり、問題解決したりしながらやっていく以外に、今のところ名案はないのではないかと思います。ありがとうございました。次に、やはりお二人に御質問なのですが、「お二人はリーダーとして動く心構えを持っておられたと感じました。ところで、お二人だけでは全体を動かさないわけで、手となり足となりお二人の下で気持ちよく働いてくださる方がどのくらいいらっしゃるのでしょうか」という御質問です。

#### 【菅野】

私たちの下で働いた人はいません。私たちに学びを提供してくださったNPO法人イコールネットさんは、人生の先輩でもあります。仙台市には社会学級という成人の生涯学習を応援するシステムがあります。各小学校に一つありまして、教育委員会さんの支援の上、一般の学級生が運営するシステムです。そこでは、イコールネットの宗片さん、それから顧問として私たちの支援をしてくださった油井さん、その他たくさんの方から、つながりや学びをいただきました。私たちはそれを活用させていただいています。私たちは、いつもどの活動の時も、一緒にやっというスタンスでして、先ほどのパワーポイントの最後のスライドに、私と緑上さんの他に映っていた方がいますが、あの方も一緒に仙台市地域防災リーダーとして一緒に講座を受けて、一緒に活動してくださっています。とにかく基本は、岩切で気持ちよく生きていこうよ、というものです。子どもをすくすく健やかに育てていこうよ、というメッセージから、つながっていった仲間たちです。特段、私たちが押し付けることはなく、リーダーについてきてねと言っていません。みんなの資質といいますか、みんなの気持ちを集めて、活動しているのです。

#### 【横田】

そのように自然に集まってくることは、素晴らしいことだと思うのですが、大体何かやろうと思う時に、皆さんはどのくらい集まってくれるものなのでしょうか。

#### 【菅野】

岩切の女性たちによる防災宣言をつくる会自体は、20人が集まりました。そのうち、仙台市地域防災リーダーは3人でした。先ほど申し上げたとおり、いろいろな立場の人たちが集まってくれているという感じです。

#### 【横田】

そうすると、自然に声を掛けた時、割合にまとまって集まる場合もあるわけですね。

#### 【緑上】

割合にあります。いろいろな活動、テストケースなどが行われる時、大体菅野さんにお声が掛かって、菅野さんが御自身の携帯電話のアドレスに入っている人に一斉メールをばーっと送るのです。そうすると、都合がつく方がその場に集まる。宣言を作った方は20人と言いますが、計4回のワークショップ中、

全て出られた方はほんの僅かで、それぞれ自分の都合のいい時間帯に合わせて参加する活動が多かったです。

実際、避難所や炊き出しの時も、PTAの役員さんや保護者の方が自分の都合のいい時間に合わせて、学校を訪れてお手伝いをしてくださいました。ですので、その時たまたま来たメンバーの中で、前日の引継ぎをしている人がいれば、その人がある程度指示をするだけで、本当に上も下もない関係で動いております。

#### 【横田】

よく分かりました。次の御質問ですが、一般的な質問です。「仙台市の被災地の復興の現状はどうなっているのでしょうか」という御質問です。例えば、「岩切と他の地区、隣の名取市等はどうなったのでしょうか」とも尋ねています。

#### 【菅野】

分かる範囲でお答えしますが、沿岸部はまだ切ない感じです。仙台市の中央部である青葉区や泉区辺りにいる人たちは、多分気付いていないと思います。昨日、私は20年振りに飛行機に乗って、神戸にお邪魔したのですが、仙台市を飛行機から見下ろしたら、茶色い部分がいっぱいでした。元々、茶色ではなくて、家が建っていたところが何もなくなったためです。それが名取市だったり若林区だったり宮城野区だったり、それからずっとつながっていく沿岸部の状況なのだというのを再認識しました。空港近辺はまだまだ復興関係の車両で込み合っています。岩切においては、建物がどんどん新しくなっています。そういう部分では、復興は進んでいると言いたいと思います。

#### 【横田】

ありがとうございます。次の御質問は、「子どもに東日本大震災の経験を伝える、大人にも伝えていくということで、防災講座でそのようなことを行うのでしょうか、その場合に、どのような点に注意しているのか」という御質問ですが、どうでしょうか。

#### 【菅野】

一緒にやろう、ですね。私たちはずっと一緒に年を取っていくし、一緒に君たち（子どもたち）が大きくなるのを見ているおばちゃんだから、一緒にやろう、ということですかね。特に子どもたちには、あんたたちの町だから、あんたたちの未来だからね、だから、一緒に作ろうよ、と防災講座で伝えているメッセージです。

#### 【横田】

よく分かりました。次の御質問は、実際ボランティアとして東日本大震災で現地に入られて活動してきた方なのですが、「災害直後、ゴールデンウィーク等を使って、個人で宮城県に行き、現地ボランティア活動に参加しました。2年目の夏には、兵庫県から子どもたちを連れて、グループで現地の子どもたちや地域の人々との交流を行いました。でもやはり何かまだまだ不十分だなという印象が拭えないのですが、私たちの立場でまだ何かできることがあるのではないかという気がします。現地におられる皆さんの方から見て、どういうことを私たちに期待していますか」という御質問です。

#### 【菅野】

来てくれただけでも本当に嬉しいです。本当にありがとうございます。そのように思っているだけでも本当に必要なことだと思います。ただ、もしできたら、その思いを被災地の人たちに伝えていただけないでしょうか。それはすごく私たちの力になるのです。今日、こうやって皆さんが集まってくださったことで、皆さんの思いがすごく伝わってしまって、何かしんみりしてしまったのですが、

本当に、思いを伝えていただくことというのが有り難いと思うのです。

旅行で被災地に来てくださるのも嬉しいです。被災地に行くのはどうかな、と思われている方いらっしゃると思いますが、私たちのことを分かって努力してくれる人がいるというのは嬉しいです。先ほどのトイレの話ではないのですが、心配して、どんな様子だべって見てくれる人を、なんだべ、そんな人のことじろじろ見て、と思う人はいないと思うのです。特に子どもさんは、うちのことを見ていただいて、交流していただいて、その経験を地元を持ち帰って、いろいろなこと、いろいろな思いを広げていってくださる。それは本当に有り難いと思っています。

#### 【横田】

もう一つ、御質問があります。この方は現在、災害時における要介護者支援体制作りに取り組んでいらっしゃるようです。「岩切の経験から何か、私たちにお伝えしたいことがあれば教えてください」という御質問です。

#### 【菅野】

私は、防災などの学びを深めていくことで、震災時、知識不足だったことを知りました。今、被災地等に向かうボランティアさんたちの一つの基準である「スフィア基準（災害支援や人道支援に関する最低基準）」を学ばせてもらっているのですが、自分たちがしてきたことは本当に足りなかったし、思いが至らなかったという後悔があります。ただせっかく学ばせてもらったので、次には活かせるという気持ちもあります。

当時のごたごたとした避難所を、要支援の皆さんと、一般の皆さんを分けることとか、妊婦さんを別室に移動してもらうこととか、そういうことをスムーズに、当然やるべきこととして、果たしてやれたかどうかとなると、一言で言えば、やれなかったと思います。一人一人への対応として、寒くないですか、奥に行ってください、もし、移動してもらえのだったら、あっちの避難所の方が寒くないと思いますよ、とか、そういう働き掛けしかできなかった。私たちとしてのすごく反省点で、先ほども申しましたように、今私たちは防災マニュアルを作っているところです。そこには、仙台市さんからいろいろと御指導もいただいています。防災マニュアルによって本当により良い、快適になるということは多分ないと思いますが、でも私たちにできることとは、お互いに力を出し合うことです。ですので、防災マニュアルにどうそのことを盛り込めるかを、私たちは今考えているところです。

#### 【横田】

これは大事な点です。恐らくこの点については、他の登壇者の方も御意見があるかと思いますが、もし御発言があれば伺いたいと思います。まず差し当たって、小林さんから、高齢者や入院中の方たちのように一人で逃げられない人たちが相当被災しましたが、これを今後、防災に活かしていく場合に、どういうことを、例えばまちづくりの観点で反映できるのか、お考えを伺わせていただければと思いますが、いかがでしょうか。

#### 【小林】

先ほども申しましたように、災害は弱い人により重く掛かりますので、要介護者の方が最も災害を受けやすいです。多分、東日本大震災で亡くなられた方の多くは、そういった方ではなかったのかと思います。そもそも、今一番問題となっているのは、個人情報の保護という問題で、介護が必要な方々に対して、いろいろな部門ごとに情報を持っておられますが、その情報の利用は、その部門内だけに限られています。個人情報のため、共有化させることは難しいといわれるのですが、防災の面では、そのような情報を共有化しなければいけません。誰がどこにいるのか分からなかったら助けようがない、という話もありますし、そういう情報がなかったら、そういった方たちを思い浮かべることがないわけですから、支援も始まらないわけで、そうした個人情報保護の問題が解決できるのは多分、地域・

近隣の人たちの中でしかできないと思います。

ですから、先ほどからお話に出ています地域防災リーダーや自主防災組織などでは、いろいろな知恵があるのです。災害に非常に弱い要介護者や歩くのが困難な人、車椅子の人、寝たきりの人などがある位置を把握できるような地図を作る。でもそれは、犯罪等に悪用される可能性があるかもしれないので公表は難しい。ではどうするかというと、ある地区では、災害に弱い方を知っている人の分布図作りました。民生委員の方々は生活保護を受けている方を知っている、ヘルパーの方は担当の要介護者のことを知っている、そのような人たちがどこにいるのか、これくらいは公表してもそんなに問題はあります。そのような地図を作ったコミュニティもありました。また、神戸市長田区の真野地区では、介護を受けたい人が名乗り出るシステムがありまして、それは当然、地域で情報共有できるようになっています。

では誰が助けに行くか。これは役所が決めるものすごく問題がありますので、やはり地域ベースでみんなで話し合っ、この町内は彼がなんとかするか、そのようなことを決めておくといいと思います。ただ、1年2年経てば、町はどんどん変わります。住んでいる人も介護する人もされる人も変わります。ですから、ずっとそのような取組はやり続けたいといけない。半年に1回ぐらいは更新しないといけないと思いますが、それが続くかどうかという問題の方が大きいです。

知恵はいくつか出てきますが、それをずっと続けていくのは、やはり地域の力が必要でして、それをみんなでどうやって高めていくかが課題なのです。しかも、大都市では地域の人たちが自発的にというのは、なかなか難しい。神戸では、それを無理矢理やらないといけないシステムを作らない限りは、続いていかないのではないかなと思っており、頭を悩ませているところです。

#### 【横田】

富永さん、加藤さんにもお伺いしたいのですが、今のこととの関連でもあります。とりわけ、精神障害者のような方は、自分から判断できないことも多いと思いますが、ケースによってはそういう方たちを含めて災害時にどのように対応したらいいか、ということについて何か具体例があるかお考えがあるか、教えていただければと思います。また、要介護者、身体が不自由な方の中に、当時御自身の精神的な障害があるために、他の人とコミュニケーションできないなど、様々な事情のある方がいると思うのですが、そういう方たちについて、どのように社会が取り組んでいっているのか、教えていただけないでしょうか。

#### 【富永】

子どもの支援に携わっていると、自閉性障害のある子は避難所で生活できなかったと聞いています。ですから、このシンポジウムは法務省主催ですので、障害のある方に優しい避難所や仮設での生活をバックアップするような法律の制定が必要だと思っています。今、そのような法律がどのようになっているか、知識がないのですが、そういうことが求められているのではないかと考えています。

#### 【横田】

ありがとうございました。今日、神戸地方法務局の局長さんも見えておられますので、ただ今の御意見、検討して下さると思います。それでは加藤さん、この点についてはどうでしょうか。

#### 【加藤】

確かに、東日本大震災の状況を見ると、介護が必要だった方たちに支援が行かなかったという点はあると思うのですが、ただもう少し小さな災害のケースを考えると、阪神・淡路大震災の時とは随分違って、進歩しています。要するに、介護保険などが非常に発展したことによって、介護している方の情報というのは、地域の地域包括支援センターや保健センター等が持っていますので、どこに誰がいるかというのを、行政はよく知っています。少し小さな規模の災害ですと、すぐに動くような制度

になっているので、その点は阪神・淡路大震災の時よりは随分進んだなと感じています。

ただ、東日本大震災のような災害になると、支援する側が被災してしまうので、支援者がどこにいるかという情報が分からなくなってしまう問題が発生する。ですので、それをどうバックアップするか。例えば、外部から来た人たちにその情報を提供することは可能なのか、ということも考えなければいけないと思います。

もう一つは、介護する側は、こういう場合とでもしんどいのです。ずっと自分の家族を介護している人たちや、施設の中で介護している人たちというのは、災害が起きた後、そのよう人たちを守りながら、かつ自分のことも考えなければいけないので、とでもしんどい立場に立たされます。そういった方たちのこともサポートするようなことが必要ではないかなと思います。

#### 【横田】

これは必ず社会で取り組んでいかなければいけません。恐らく、先ほど富永先生がおっしゃってくださったように、法律によって国、自治体に取り組まなければいけない部分があると思うのです。これから日本も高齢化が進み、この問題は小さな災害であっても取り組まなければいけない場合が出てくると思います。大きな災害の場合はより大変だと思いますので、また御一緒に考えていきたいと思っています。最後になりますが、菅野さんと緑上さん、「この皆さんの活動、今度どのようにしよう、していこうと思っていらっしゃると思いますか」という御質問が入りましたので、短期、中期、長期、どういう形でも結構なのですが、お考えをもしできましたら、お願いいたします。

#### 【菅野】

はい、基本は岩切をいい町にしていこう、子どもたちを育てていこう、それを基本目標におきまして、防災だよ、命を守るよという方面からだけではない、いろいろな方面からの働き掛けで活動していきたいなと思っています。今一つ、基調報告でも発表しましたが、新しい女性たちの防災宣言を作りたいのです。実際に起きた震災を踏まえて、私たちが辿ってきた道、それから岩切が変わってきた道を踏まえて、新しい防災宣言を作るというのが、まず一つ目の課題だと思っています。

#### 【横田】

ありがとうございます。これで全ての御質問に答えさせていただきました。まずパネリストの皆さんにもう一度、感謝の拍手をお送りしたいと思います。

それから会場の皆様、最後まで熱心に御参加いただいてお礼を申し上げます。それでは、私どものシンポジウムはこれで終了させていただきます。

\*このシンポジウムの「パネルディスカッション」の様子は、動画共有サイトYouTubeの「人権チャンネル」にて視聴可能です。

<https://www.youtube.com/jinkenchannel>

#### ●関連情報

\*兵庫県こころのケアセンター <http://www.j-hits.org/>

\*みやぎ心のケアセンター <http://miyagi-kokoro.org/>

\*ふくしま心のケアセンター <http://kokoro-fukushima.org/>

\*東京都精神医学総合研究所 <http://prit.igakuken.or.jp/>

- \* 兵庫教育大学大学院学校教育研究科 人間発達教育専攻臨床心理学コース  
[http://www.hyogo-u.ac.jp/course/cli\\_psy/](http://www.hyogo-u.ac.jp/course/cli_psy/)
- \* 富永良喜 ブログ「ストレスマネジメントとトラウマ」  
<http://traumaticstress.cocolog-nifty.com/>
- \* 日本ストレスマネジメント学会 <http://jassma.org/>
- \* 日本心理臨床学会・支援活動委員会 東北地方太平洋沖地震と心のケア  
<http://heart311.web.fc2.com/>
  
- \* 兵庫県立大学大学院 緑環境景観マネジメント研究科 <http://www.awaji.ac.jp/gs-ldh/>
- \* まちづくり株式会社 コー・プラン／CO - PLAN <http://www8.plala.or.jp/co-plan/>
- \* 阪神大震災復興市民まちづくり支援ネットワーク <http://www.gakugei-pub.jp/kobe/>
- \* 阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター <http://www.dri.ne.jp/>
  
- \* 平成24年度第2回仙台市男女共同参画推進審議会 議事録  
<http://www.city.sendai.jp/shimin/danzyo/shingikai/H24dai2kai/dai2kaigiziroku.pdf>
- \* 内閣府 男女共同参画局『共同参画』2013年8月号  
<http://www.gender.go.jp/public/kyodosankaku/2013/201308/pdf/201308.pdf>
- \* 男女共同参画の視点からの防災・復興の取組指針 解説・事例集  
[http://www.gender.go.jp/kaigi/senmon/kansi\\_senmon/wg01/pdf/giji\\_03\\_3.pdf](http://www.gender.go.jp/kaigi/senmon/kansi_senmon/wg01/pdf/giji_03_3.pdf)